

GLASS THEATER for the Kyoto International

Film Festival



夏の夜の特別上映会。夕暮れとともに、賀茂川の水面に設けられた、透明

なガラスの客席へと、人々はやって来る。やがてガラスの覆いの中の木組

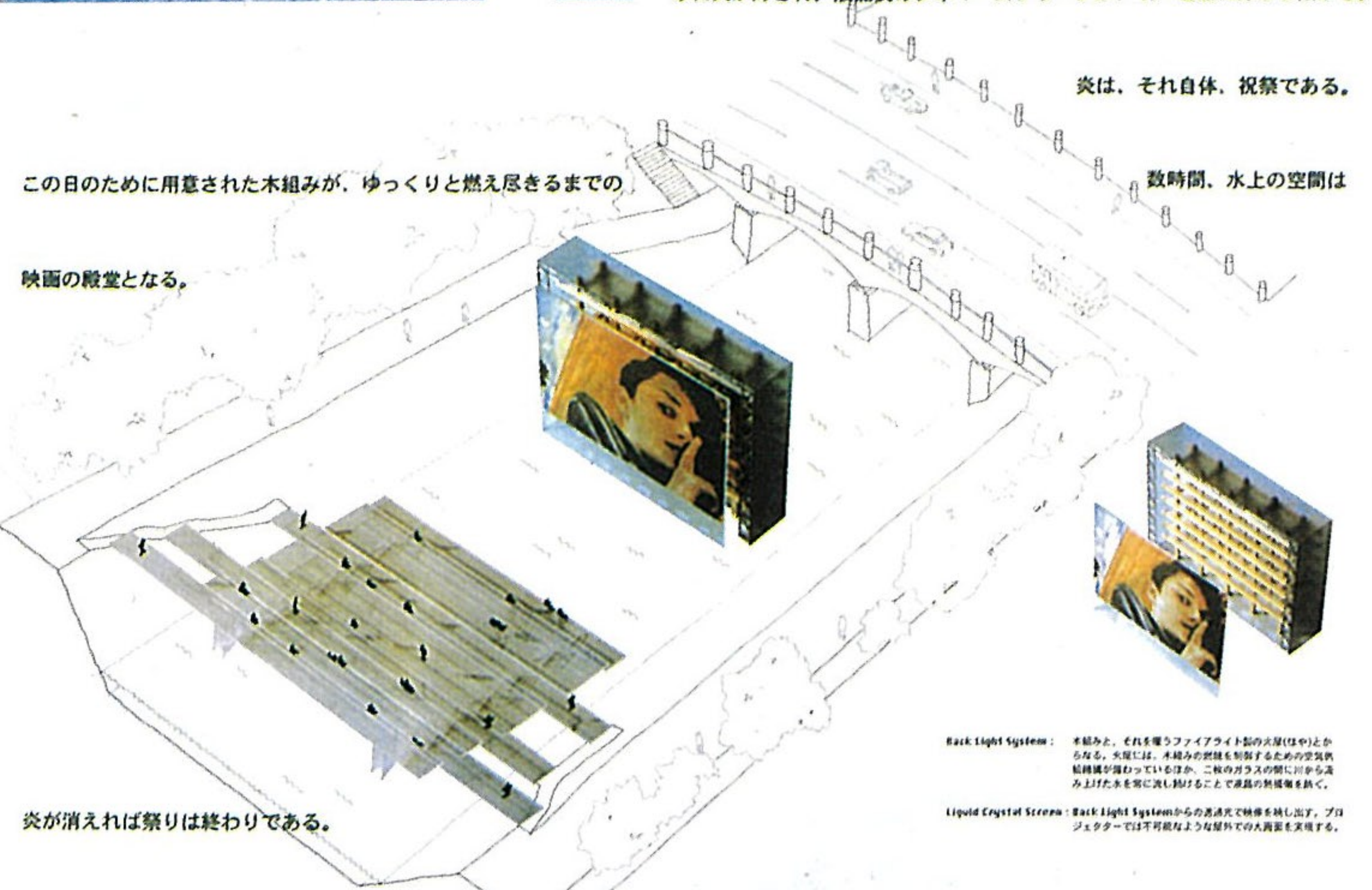
みに火が灯され、液晶式のシネマ・スクリーンが、明々と闇に浮かび上がる。

この日のために用意された木組みが、ゆっくりと燃え尽きるまでの

映画の殿堂となる。

炎は、それ自体、祝祭である。

数時間、水上の空間は



炎が消えれば祭りは終わりである。

スクリーンは明かりを失い、観客は余韻を胸に帰路につくだろう。川のせせらぎと、頭上をおおう満天の星空があたりを支配する。

一期一会。この一回性の祝祭の後、変わらずにそこにあるものは、ただ、

眼には映らぬガラスの舞台装置だけであることに気づくのである。

Back Light System: 木組みと、それを覆うファイアライト製の火屏(ばや)とからなる。火屏には、木組みの炭化を抑制するための空気供給機構が備わっているほか、二枚のガラスの間に川から汲み上げた水を常に流し続けることで液晶の熱負荷を低く、

Liquid Crystal Screen: Back Light Systemからの透過光で映像を映し出す。プロジェクターでは不可能なような屋外での大画面を実現する。



The wooden frame burns out finally.

流れゆくもの-とどまるもの

